

諸

物類稱呼

禽獸  
魚蟲

二

W52-5

Ko 85

2





~~22712~~  
22707





馬

物類稱呼卷之二

動物

じま○ト後まきてハ。まあとよぶ同ま後鳴郡及びト野まにて  
 ハ。まあめとよぶも外びまきて牧めえんやめなとよぶにめの字を  
 付てよぶ是に今つむくらくをさるむびーなとよぶ物をいみ一つを  
 くらめばをくらめといひたけひあて古代の後めまきるものなる  
 有し牡るを修勢まきて。まるるころし牝馬を奥及南に於て  
 かけごとしよ和國及野ま又ハ上後にして。だまとも。だるともいふ  
 紀ハ和名にむいじま今しよ小若狹たけ又法國まて。ざぶやくと云  
 意ハ軍馬に用いどもろくの種役につかふあり

牛

○特牛を或肉及び山中ま和國まに。こしつとよぶと云ま





野猪

狐

よのこにてとらふ遠にまほしては。あこたま。○獺を言ふにて。麿のこ  
 こら申す東國ともい。べここよ。又。つてとひこてとらふ。  
 ことひの誤なり。又牝牛ハ諸國ともにあめうとと呼ぶ。  
 いのき。○牡と西國にて。うのをこよぶ。牝をのかる。とらふ兒哉。  
 江戸にて。此ぼくともう。美内にて。こぶら。こむら。が。

和名

きつね。○東西にて。鹿。きつね。は。夜ハ。よものこと。等。西國にてハ  
 のよものひととらふ。又。東西をまて。て。けつね。とよぶ。又。か。ハ。きつね  
 も。詠。詩經。に。ハ。つね。と。訓。又。東國にて。ハ。鹿。きつね。と。呼。ハ。  
 〇。つね。と。呼。常陸のまにて。ハ。白狐。を。と。ら。う。と。ら。ふ。是。ハ。世俗。きつね。と。  
 稲荷の神使なり。とらふ。ぬ。稲荷の二字を音に。を。へ。て。稲荷。と。呼。  
 する。か。る。又。鹿。と。か。つ。て。物の名。と。よ。び。と。ら。る。又。あ。う。や。う。た。  
 婦人兒女のものに。を。そ。れ。又。ハ。物。い。ま。ひ。する。人。か。る。辻。を。の。後。と。呼。







をとりよせて納めに和申の氣ふせ給ふ稱を棄てたるを  
 描を今次の庫くろ孫まごと稱し今次を略してかゝるとぞ云なかりし  
 ける鎌倉志不云今次之庫の旧跡きゅうせきハ稱名寺の境内けいん何れ建院  
 のうしろ乃切通その前の富文庫の跡あとハ條越後守平顯時  
 このとらに文庫を建て和漢の群書ぐんしょを納め儒書じゆしょハ墨下  
 佛書ぶつしょハ兼下を押おしと有又源倉大草紙小武元全澤くわくの學校  
 ハ小條九代繁昌はんしょうのむじまくらと為ありきん旧跡きゅうせきなりと云へり今も  
 若沃の記きつるもにて描兒おのこをおんにい人何れ描えましこごらと向  
 へて描えのぬい一是ハ金沢描えありと云ふを常語とす

花山院御製歌次に

未集「おとまりを金まるといふあはぬ庫描を思ふ為ふとおめやん  
 又尾のうしかきを土佐おとまりハ。かぶ孫と稱し実証してハのいん



鼠

庵とよふ東國までハ。牛鹿尾ぎんぱんといふ東鑑とうかん五分尾ごぶつとあり

祐すく。○冥西よて。よめ又よめが君といふ上野まで。秋あきのよめ

よめ又たふく。又むじもあざといふ東國よもよめとよぶ所多し

遠江国にハ年始よむかりよめとよぶ其角う祭句に

「明る夜もかのかにみりよめがきこ

嗚な哉が住す去き来き白はく除ぞ夜やうりえ朔しつけて氣きのそを嫁よめ君きみと云いにわ

在ざい候こうハ志し々々とぞ野の坂さか云いぬが君きみハ春はる氣きよて秘ひとらんののりある

今いま按あに年としの始はじハ万まんのり送おく詞ことばと本ほん信しんふ物ものありあまハ寐ね起おきと云い

へる詞ことばを忘わす悖へいてい様さまつむじもあぐるなりと唱なふるたぐい教しよある

嵐あらしも寐ねのひび死しを腐くされハ嫁よめ君きみとよぶて也やあまハ人ひと又また春はる氣きと

いふ時ときハ昔むかしハ月つきのこと介まれハいを首くびぶさう尚なほ思おもふことハ略りやくと

うふもち○系けいにて。うふもち東とう武ぶよてびとらもち西せい法ぽうにて

龍鼠



蝙蝠

○むぐら守法にて。むぐらそら國まで。をぶらもちら遠江にて。  
いづらもち大和及伊賀伊勢等まで。をぶらもち越後にて。おぼ  
といふ  
かふもつといふはかほり  
○美肉まで。改くひるもも云近江まで。  
改鳥とよぶ

新撰六帖に衣笠肉大長

目くれば新に飛ぶかきかすの扇の風もさきかきなるも  
又梳る子にさあしききものおそくかすをきかか扇  
のまきなるも

品鼠

むさびび○美肉まで。野食といふ東國あて。もとくはとほり西國  
あて。そむをさきさきとほり後麻にて。もまといふ  
もまといふ和名もこの物しるなるも。古河に大和守春日山



川童

高き津玉之國このなごよきありせしるも東國まで日光山にさめり  
まほしき人の呼がごとく常に指には元居きよて秋言ささよう死ん  
て人の面をおほよひきくようなる事によることあつらひ

ま本 春見と秋言ささ秋のこまきえよりあまの海なるむきひの  
がたらしの○身肉及九州まで。がいたらし又川のまの又川童と

よぶ九死又多一コトさて死後の柳川む多一 月防及石見又雲にて。えんこりといふ

去佐玉の去民ハこがたらし又かざらし又えんこりともいふ此此こ

よく左右にみろぬけて滑なめりうえんこり 援えんこり 撰えんこり 又ゆるがねに河た師もえん

こりといふ

東玉に。かつむとと川童のちびもは遠く小見を 越中にてかかつむととあつらひにうもかつむとともいふ

伊勢の白子にして。かそく小僧といふ

こまがさちいふ氣をかりのわらものごとくがいらの毛赤うして



塚（ひら）に四（ひら）なるささるる水をたくふる時ハカハはなぶつり 性相（せいじょう）撲（た）  
 を好（この）く人をして水中（すいじゆう）に引（ひ）入（い）んとも武（ぶ）ハ粧（あや）を（し）りて婦女（にょにょ）銭（せん）  
 共（とも）嬉（ひ）と（し）ま（し）つ（し）ら（し）ひ（を）を避（さ）る（に）ハ極（ごく）を細（こ）小（せ）志（し）う（び）と（な）ん又（また）九（く）石（せき）  
（つら）川（が）流（り）の（り）人（び）征（しやう）吟（ぎん）と（る）所（しよ）に

川（が）弁（べん）へ（の）や（と）そ（と）く（と）ち（と）し（と）も（と）る（よ）川（が）ぶ（ち）ち（ち）男（お）氏（し）ハ（ま）あ（ま）あ（ま）  
 右（みぎ）の（みぎ）守（まも）を（を）吟（ぎん）詠（ぎやう）を（を）害（がい）を（を）の（の）が（が）る（よ）し（し）ひ（ひ）つ（つ）ふ

〇（こ）播（は）及（じやう）ま（ま）て（て）〇（こ）さ（さ）さ（さ）だ（だ）伊（い）豆（ぢゆう）後（ご）河（が）を（を）て（て）の（の）び（び）さ（さ）ご（ご）薩（さつ）摩（ま）  
 ま（ま）ま（ま）て（て）の（の）び（び）ま（ま）ま（ま）と（と）ふ

〇（こ）越（えつ）後（ご）ま（ま）て（て）〇（こ）あ（あ）ど（ど）と（と）と（と）云（い）奥（おく）及（じやう）ま（ま）の（の）た（た）ふ（ふ）と（と）云（い）冥（めい）西（せい）東（とう）  
 び（び）さ（さ）ご（ご）び（び）あ（あ）や（や）ご（ご）い（い）ん（ん）と（と）に（に）い（い）ま（ま）ご（ご）の（の）あ（あ）や（や）ま（ま）ま（ま）と（と）なり

〇（こ）越（えつ）後（ご）ま（ま）て（て）〇（こ）あ（あ）ど（ど）と（と）と（と）云（い）奥（おく）及（じやう）ま（ま）の（の）た（た）ふ（ふ）と（と）云（い）冥（めい）西（せい）東（とう）  
 ま（ま）て（て）の（の）た（た）ふ（ふ）と（と）云（い）冥（めい）西（せい）東（とう）和（わ）名（な）なり  
 〇（こ）美（み）岡（おか）及（じやう）中（ちゆう）玉（ぎよ）東（とう）武（ぶ）大（だい）に（に）〇（こ）か（か）  
 〇（こ）美（み）岡（おか）及（じやう）中（ちゆう）玉（ぎよ）東（とう）武（ぶ）大（だい）に（に）〇（こ）か（か）  
（は）は（は）い（い）よ（よ）め（め）と（と）ふ

鷓鴣

刀鴨

睢鳩



つがせとらふ上総まで。いふとらふ長湊まで。ハ。ゆめとらふ佐多にて  
いちつがせといふあとの遠及まで。めうちんといふ東まで。むらさ  
武の神奈川まで。ぞうてうむらてうとらふ上及。かばるまといふ  
信及まで。めうなといふ後河まで。ひやうたんごといふ仙臺まで。かハ  
きどといふ

白石翁云ふほとハ湖をいひぬれハおちとハ湖中にあるのまみち  
おれぬ。又かいつがせといふ水に没する音をかぞうといふ。と  
見えさす。又俳諧師支考がいくとくおちの海とハ鳴鳥のよむむの  
さむ波あれハおちの海と云。今梅に梅ハにむひちの暮之おほの海  
とらうらくと目の出るに海のおほへるをうらふとハ香のこきに  
あふげ。教養のこころ。光源君のこころ。或相臺の巻にいしつにな  
いふといえう。又法橋昌長翁のいよく研師又を研よてそれ



鷓

に色を付らそあまひとつけるといふ幻鳩の脂をいりまあり又  
ふろふ炭なごとも目に映らるといふなり

かきめ〇中国よ〇うらこと称と紀前まで〇祢こどう又大雁おろがんといふ

仲みとむ鷓かきめいふ俗名まで〇かきめさうふと俗及武の西川まで〇いこ  
大なりともいふ

祢かんこ本牧まで〇漢祢ことも呼ぶ近しまで〇苗代かひらうも又〇祢こさだといふ

鷓うまかのつぐ多猫のつぐに似たり故に異名ととあつまる あつまるに加萬

目又鴨妻うまめと書り鴨妻と鴨のつくりにてすこがきなるをいひ

なる一〇一況ふ沖にあるをかきめ残いそに集あつまるをいそちどうの河に

証あか合あかとると如鳥といふと直籠翁の伝つたなり未詳

魚狗

かかせ一名少微ちやうび〇申まをに〇まごころ京都及東武まで〇かかせこ

武州及下野にて〇そな奥州仙臺まで〇すかむごころ出羽でわにて

〇る下総まで〇まよふ甲斐にて〇そびを後河を沼津ぬまづにて



○多比と云ふ加州まで。むぐり天作及備前にて。○志に伊勢及出雲  
肥及四國まで。○志やび或ハ志ヤうじん産摩志にて。いといと称す

かせといふる。涼山ミヤマとびと云物あるに對しての名を産摩次

涼山ミヤマいといふ。東志にて涼山志やうじん志或前によりてハ水乞

と云又清盛あどく是名と云称はざる。飢餓して水を好にうて名

付と云。言物と云。名を稱するもいざるあり。一旧事紀古事紀日本

**紀**とも翠智と有

**鵲**

かさぎカサギ○あまにむ。唐タウからいといふ。又。高築鳥カウラウイと云五茂内及東志に

ち。鳩トビより小羽チハに黑白を天武帝御時新羅より鵲一隻と献す

らい○九及まで。らいと云土佐志にて。とうくらうと呼丹後まで。あつ

名と云長門志まで。仲のたゆふと云いもくはましく白一箱とく脚赤

か賀玉白山に鵲ウと云名を同名実物

**信天翁**



秧鷄

鷓鴣

白山の松のこかけにかざらひてやまらにまある物のもや

くおふ○仙臺にて○なまするもといふ いづれを多くをなくに似し因て  
たぐくみ習と身に似し

かやぐら○東まにて○うとまぎと称を後河にて○かん志んを呼

いづれを多くをなくに似し因て  
たぐくみ習と身に似し

月令に三月田氣化して為鷓鴣と云是なり

萬雀

あを志と○遠いまで○まぢんと云東ま及田圃まで○あをドと云

美化とて○まぢもうと云 鷓鴣の似てまふあや  
いづれを多く

まぢを略してあをドと云鷓鴣の林は在て野にいで

青志とハ藪林にまぢものあり

かゝぢろ○遠いにて○赤ぢんと云

まぢぢとてといふ物を片終と名付又ちまぢところちまぢところあ

ものを遠くといふ多巧にまぢをなまぢに東まにてハ一筆を呼よ

畫眉鳥



百舌鳥

と鳴くと云遠及よそハつんと五粒<sup>うづら</sup>即朱まけこと鳴くと云遠及よそハ  
をうがとくハ三二十四と勢<sup>まが</sup>と云歐陽公詩百轉千聲隨意移<sup>ツテ</sup>とを  
吳域<sup>わい</sup>同漢なり

つぐと○み秀内の俗つむぎと云美東にて○てうまと呼加賀にて。  
かじめと云遠いよそつぎめと云仙臺にて○つぐと云

本朝食鑑

鶉

秋名

馬鳥

馬也

鳩

鳩

鳩

鳩

鳩

繡眼兒

布穀鳥

蚊母鳥

東に於て<sup>てう</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>は</sup>と云又詭にけら後てつぐと云あふと  
いえるもかる事を云よや京師も除秋毎に乞と<sup>あが</sup>食を<sup>え</sup>例<sup>え</sup>  
めむろ○養摩にて○花<sup>な</sup>吸<sup>あ</sup>と云上<sup>か</sup>係<sup>け</sup>と云をうま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>と云

つとと<sup>い</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>○伊豆駿河辺と云○ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>と云

土人のいづくいも<sup>い</sup>鳴<sup>鳴</sup>以<sup>以</sup>  
回のあり<sup>あり</sup>と云

かつこうと云

俗かんこ

○甲及びその豆うと云東に於て○豆まきと云

と云ふ

大和本州

みよく俗かんこを杜能<sup>か</sup>の<sup>の</sup>雄<sup>の</sup>と云もの



くす **本朝食鑑** よ云ほとぎまを樹によつて鳴く時をかこくらの樹に

よおるなきなりとさすすはそ別むくひもそ故に世俗かこくすの

鳴くとす 今按には従つによる時かこくまの雌は出喰をぬる

かつこををそらくハ杜鵑の雌そハあるへくす杜鵑ハ雪の原を

かりてふ成生一かつこをハ類な白鳥の原に子をなすとものあり

**杜鵑**

ちとふと ○伊豫本松山を過して○こつてをと称とそ子規一名を

当代てをこらふつてころて轉る詞あるべし

**燕**

つをめ ○但馬をよて○ひいごとを播及よて○ひいごと呼

**和名**に**爾雅集記**と引てつをくらめと注せり今俗につをめと

いひ又つをらと云ハ後人を後をとぶきて呼也斥用今の人らつを

とむかりも呼又奇よハつをくらめもつをめとも呼とつをらとハ詠

格か一俳諧よつをくら大伴保を又つをくらめとハおくらひの



斑鳩

和列之と篤信存の説あり又胡燕。越燕漢燕等之胡燕。つむめと云越燕より八梢大りて山上岩穴がんけつとむ巢ハ横に長く  
狹の方より出入と越燕ハ巢のより出入をも但馬玉村見よ妙  
見ひいごごハ胡燕あるべし

つちくれむ古俗の○東玉にて○きどばと称と西玉にて與よとら次

むとく呼西玉にて○東玉にて○きどばと称と西玉にて與よとら次

木啄鳥

てらつつきと又けらつつき○江戸にて○まつつきと称と又東玉にて○とげら

と呼ト認まて○番匠ばんぢやう名と云

鶉

ふくろふ○常陸玉にて○称こ名と称とこの名よく鳥とれたらうとてかくらぶるにや上認ま

○よごごと呼伊勢白子にて○名長と云

挙白集

たのむまよりおけと鳴くをのれが名長の料よと云又俗に

表ぬるを果つくらと鳴とも又行田舎の人ハみ即七かうと



鶴

鳴くは薩摩公の人ハ月弓くまうとなくといへり

とそさざいとさざい上とさざい古とさざい○奥及まて○こそぬまこと仙臺にて○こそくらをわね

あて○こそつぐと呼西園まて○こそつるまて云

或説よびる海いづみのまてに之衆棲すまて長と都にこそをさんざいと名付るを

とそさざいとふととて 今接にこそ、海ちうさざいといふ人さざいと

いひ名の鶴つるとる色さざとハささやうなるさいぢりさいぢりゆし之衆といへる

系にハ何ぶふるべし又鶴つると云をハもろくのハを怖おそめておをる

野も鷹の屬たぐひ也とふそれ中にとそさざいハあて怖おそまど却かへつつま

と外の中を捕とらて野のにあふとて時候ハ怖おそまて食たふ事正ただに是と云

せきれい和名ハくちがう日本紀私記○播磨にて○かからずとめと云西京

及西園又ハ奥及まてハ○いーなきこと呼伊勢白子にて○とままことめと云

遠江及上総常陸あて○ままたる○と云東園あて○せきれいと云薩

鶴



割草鳥

麻にてハ草を刈りたるをいひたり。たゞ草を刈りたるをいひたり。○  
まゝいふ。日洗ふ。みちたさきともいひたり。たまま  
いるたさきともいひたり。

よしらさきめ。○葉肉及物及田。○よしらさきと云

よしらさきといひは。割草をいひ。穀をいひ。申の法をいひ。おたに  
いふ。まこと石。ハ。丈。の。説。あり。

出。及。西。海。の。國。に。して。り。○。ま。ま。よ。り。く。と。味。古。佐。の。國。に。して。り。○。ま。ま。よ。り。く。と。味。  
を。け。ら。な。ま。ま。よ。り。く。と。味。

か。あ。り。て。○。よ。し。ら。さ。き。と。云。播。及。り。て。○。け。ら。な。ま。ま。よ。り。く。と。味。古。佐。の。國。に。して。り。○。ま。ま。よ。り。く。と。味。  
東。海。に。あ。り。て。○。よ。し。ら。さ。き。と。云。

あ。い。と。よ。し。ら。さ。き。と。云。入。る。物。と。云。る。の。こ。ろ。に。云。ら。る。べ。し。と。祖。徠。翁。の。説。なり。  
い。よ。し。ら。さ。き。の。説。の。よ。し。ら。さ。き。と。云。る。の。こ。ろ。に。云。ら。る。べ。し。と。祖。徠。翁。の。説。なり。  
い。よ。し。ら。さ。き。と。云。る。の。こ。ろ。に。云。ら。る。べ。し。と。祖。徠。翁。の。説。なり。

鯉

こゝに。○。武。藏。に。て。鯉。魚。の。ふ。か。る。を。い。ひ。ぬ。ん。と。い。ふ。と。稱。す。



是ハ文正といふをあらまると呼し武時予ガ僕ノ鯉を庖丁せんとい井  
のほとりもてひりて井の中ハ魚ハぬといひまづうたれハ担寄よきる

ついで井筒にこくと魚引りしう男も今の男も 吾山

鯉

たるご〇冥物まの〇たるごといふ冥東にて。おがぶたなと叫つるにて

〇おがぶたなと云 たるごハ鯉の類又海に鱈魚  
も同名を云揚り

鯛

なよよー け魚の類名にせにがらと云  
日本紀小云吟妙これあり 〇極小な物物を江都にて。をがこと云

東に小児をかがこと云  
かたにて。ちよがと云云依にて。いきなごこと云 〇おがぶたなと云 おが  
にけ魚の小なる物を云

いさるこをばやと云  
いさるこをばやと云 〇おがぶたなと云 いさるこをばやと云  
いさるこをばやと云

といへば然らぬハいさるこハ猶魚なり  
いさるこをばやと云 〇おがぶたなと云 いさるこをばやと云  
いさるこをばやと云

漁人養の四方に廻を造て是をよふを養門と云固く養をのなを

一説に此魚河と海との湖境を往来する魚を養て洲をのなを

江戸にてハ六月十五日より洲を呼十四日とをいふと云九月に



棘魚

泥味どい多く脂あぶら多くしていよく味い良也又さくし洗ふるが如し  
肉を煮肉よめて。こざら。江鮒と称と泉州海の名産あり

○なより。がら。伊勢いせの長崎ながさきに。まくちと云。勢州及尾張よて。  
めうぎちらめうぎちら

いせいとハ勢が海魚の油漬を多くしてをとり又鯉こいに類するを  
とりていせ鯉と云。海魚の称なり東国ハばらとこの呼し又まくちとハ

よきくちめといひ。詞の送りおくりと云。めうぎちらとハ名音なごんの音義と用らる  
たひ。○豊前ぶんぜんよて。へいけと称と鱒ます龍子白鮒りゅうしはくふと魚いしいけと云。平魚へいぎ

なるべし。定喜式ていきしきに平魚。今按ハ東武とうぶよて。女メ文メ鮒ふといふ物と犯前  
唐たう洋やうふどにてハいけと呼又左ひだりの海うみようと云。いけと云。まま子こと云。いけと云

よきも平魚の轉落なるべし

○櫻鮒おうぼ。堺さかい造ぞうに櫻鮒おうぼ泉いづみ名な産うるう。の。麦むぎ葉は鮒ふ申まを田でん國こくももに  
いんさういんさう東武とうぶよて。櫻おうのの名な産うるういけと云。



鳥類

比目魚

は月出る鯛を云。前の魚津の玉にて称と  
持及西之社おれ海にたたら物と  
その魚と呼東武にては戸前をさ

と云ふ。其鯛を何れも東武にわまざしと呼出さしたて。こびるとりふ

笑東にて。奥津鯛と呼  
後及奥津にて多くをさ  
鱗に富士のがらまき云つとふ

くろだいひ。東武にて。くろざしと云。兼肉及申ふ九及四國をもに。ちぬ

だいひと呼。魚泉及茅渟浦より多く出る也。ちぬと号は他

ちぬとを魚と大に同してふ。是れとも今混して名と呼。又小成物と

。かいすと称と泉及貝津。込めて是とる。因て名をい。江戸にてハ芝浦

に多くあり

かれい。ひらめ。○兼肉物をもに。かれいと称と江戸にてハ大なる物を

。ひらめ小なるものを。かれいと呼。此とも類同くして稱す也。常陸上総

下総の浦くにて大なるを。蝶といひ小なるを。平目といふ。江戸府の魚市に

ある時、則ち名を更はず。又ある漁子。い魚と稱。相偶して。洋津と遊ぐ



此をよみぬる時ハ右の邊ハ其物なりといへ見亦辨ハれいと云  
かづれ魚の器なりといふ也

越後にてハ小なる物也。こつなぐらと呼こびらめと  
之の誤也依傍にて大なる物也

○さつじゅびと云はたて云霜月びらめを越後の系魚にして。あさを

となぐく江戸に云ほしづらめと後河にて。まららびらめとり二種。この

とれいと云をこびらめ泉及て。畠田がれいと云

一の志。一名くらと云。夏物及東國の海也。一の志と云はれは

よそ。吉びらめと呼備前にハ。くちげと云越前にて。むがれいと云

さすじゅ。夏物に。ますすじゅ江戸にて。まことと云伊勢白子にて。あめ

の魚と云あめふら故に名とんあめふら紀次にて。だうあめふらと云

あこ。○か賀あこと云。そちめと稱と。い魚播磨抄あこと云にあこに

よそ月藻魚の大なる物とあこと呼てあこ和漢三才圖會ニ云

魚鞋底

古幾須

阿古

魚類



藻魚

目張

えさう又あこ、赤魚と云

もじと○西園と○いとめなる

めなる○陸奥化量にて○そしきまよる

藝方かまめなるの兒と呼てあること一様仲

味ひ原一病人食らことなれとあり

かさご○奥及まて○しからと云 かさご藻と云

いさき○奥及にて○奥筈たくせいごと云

あいらめ○奥州とて○糸うとてのひ又志まとて用は南詔とて○

あぶらめと云佐渡とて○とゞうと云後及とて○倉ろと云

本朝食鑑

小形粗鮎あぢに似る故に名づくめと稱して○あぢの鮎あぢは

あぢ又日本紀

萬葉等に魚とふと訓ど今按に尾張又を及る

の和左とて川魚と水魚と云又江戸に云鰯あぢも魚屋いさや之者ものと云も魚

笠子 魚 伊佐 木 鮎魚 女



魚 石鯰

魚 方頭 保字 保字

ありあけの産たはまの魚肆とちや何と云ふ見たり奥の方  
 言に祢しよと云ふ志んじよといふあいなめといふよと出と云ふ意に  
 て蘇わしよといひ又蘇新しんと云ふるべし又魚りといふる東五斤都  
 の小兒舌のこをさしよと云ふても舌と魚りと呼ぶの稀をさし  
 されあいなめと云ふと云ふといふるころあて後及よい魚りと云  
 つくらぬめふと八雲東にてを東地にてゆがることにおるべし  
 けりぐく○佐渡あて○いこうと云ふ護たあて○がこの魚と云  
 かるがら○冬河まて○かおじと云ふ越後魚りまて○いぢらこと呼  
 ぶ陸中魚と云ふ○ますとも云まがらう角あててく敷に  
 かいり○流は系にて○あぢらといひ又あぢを思ふぢらと云ふを呼  
 ぶ部まて○といひ接岸まて○あぢとも云ふ  
 系師の俗かろわがと略しておおうとも又赤ともいふ赤斑の  
あうまがら

○物類編卷二

○下











階の鼻祖あり古の句はいとゆきとせしむし之れ何れをいふ  
又いふと辞せると後人がもつたあまうて天文八年八月八日  
古事記に卒と辞せ

「あかひまほくも非海山み孫の松風く

鮫魚

さめ○捕魚してのさめは越前にてのさめと云ふその名は魚  
捕て残上れを仮名のつづみ形に似たりとて越前の方言に  
のさめと云ふくも大和にてはさめと云ふと鱧魚と大和に同く  
してさめくも是れぬりの名多し或は白ぶらうをぶらうかせぶらう鱧が  
もさめと云ふしつら等もさめと云ふの類あり及九十九のめは  
とてふを等又江戸にて一種のさめと云ふは下野は字類考に  
あてはるるがさめと云ふものなりさめと云ふは海と云ふの  
さめと云ふは江戸にてのさめと云ふはさめと云ふは佛坊ら







鮒

まぐろとちそのすこのすこまあるとハその眼の黒まじり青に  
 鮒いびと詠う山も赤人が藤井の浦に志比物と詠せしむるし  
 ぬま〇ホの魚乃少なる物をいふまで。もろあごを又美肉及物に  
 ぶま〇もろあご又。つむりと云一月種あると物ににて。目白と云一月  
 宗二足ももろあごはだまで。いちあごと云小陸及奥がはまで。あくらま  
 ぶ〇あごもろあごと云陸大よありあると江なまで。もろあごもろあ  
 と小陸なまで。らまとのよ。五月の頃と云六月とあるを別あうあり  
 陸なまで。もろあごと云あご及る陸にて。大うと云あ  
 かつと。〇二種。もろあごをといふまははの上いにい白い満いはい徳いをいをい  
 かつはく。〇たてまじりあご又西まで。〇うもろあごなる物も又。よ

松魚

こわとらよま今松よ。〇うづわ一石茶袋又あぶらもつよまのまもも  
 江戸にてぶらよと呼て常し物に別類也よこわとらよまのまもも魚の子







だらごとくへう按に上段のまにせよと稱するにまのまのま  
 よあつじ又繩いひのふさをむふといふこと秋をりて常とんそにま  
 なるひことまふまいつらのかことまことま又物家の産物とんがうふ  
 混びることまをいはことたにえ乾いひあをを襦いひいへふ思の子と注あ  
 よあつじ物之又繩いひのふさを物と製するともいふとを解た糸下  
 を合せてるべし又。ごまめことま物ををいふにしてハ色しひこの事  
 ら物之相掬及越後奥の津輕まで。于繩と云他甚まで。いことまか  
 して。かいぶと云九段まで。よまが又。片はと云伊賀及伊勢出を  
 又奥及のゆまで。田つらると呼 按にごまめとハ草の絲号之春の始よ  
 小夜系又田作いひかと唱いひへて祝いひしゆる也船いひ梁いひを柱いひる物于繩いひ干いひ乾いひを  
 ともてま。おに田つららのぬる又まがと云るハ葉いひの上いひに于と云  
 かど一各 小志ん〇つらと云る。さいひいいひ又。せいひいいひ云 何いひ次いひ氏

青魚



鱸魚

のえは魚あつまる時ハ泳を泳て水面に浮ぶ言の降るが如し細を  
りて是をとる腹に子ありて満ちて敷の子と云和俗鱸の字を用  
東海に出るをりてあるべし今按に津輕そなまにハ云ハ行る  
魚をにまんといふを生のふ志んといふ意なるべし又江戸にてかどいふと云て  
鱸の中にあつてこのもの之松前の諸宗に河の傍に少しかる鱸小  
かほくぬると言ふゆり

この志乃〇い魚の小なる物をと京於にて。まふがまふ及九段太に  
〇つかしと云る陸奥にてハ〇かまさらと云い魚を誇に多し故にたぐ  
魚前にて〇とららと云又古伊の海に〇をららと云魚を是ハとららと云  
志乃とららもの之を梅に鱸をと云魚ハ江戸芝浦品川沖上流下流の  
浦より是を出し西海ハこれなり 鱸の子にあはれ別種之諸河は  
つかしと云ハ小鱸といふ國をことごとく物ハ江戸にて〇をららと云魚なり



この一ろ二つと云ふは是皆種類也或人の云世に子を生れて死し又  
 生れて死す事あるを知らずして子を生る時胞衣と線とを二所に地中  
 産むるは子成長してむす子一生この一ろと云ふは子一むじこのちろは子  
 の代りといひつゝ又ありて存すに

一魚のむろ代は鱈に似る煙誰かの一ろにつなぐやくらん

鱈

いかにしきしては古に物々なるを<sup>わか</sup>りて人の事なるを<sup>わか</sup>れはなむに<sup>せ</sup>び  
 うるぎ○山城宇治まで○うぢまろと云い魚の小なる物をあだて  
 ○めいぞうがきと云はるがうぢまろの誤といふにて○めそと云ふ鱈に  
 て○かぶりと云ふく引んよつとも云ふ者陸也○かよと云信濃にて○も  
 ぢと云ふ佐美のものをうぢまろと云今梅に系物とてうぢまろを<sup>わか</sup>り  
 ハ宇治川のうちかきをまぢれりともよつて宇治麻呂人の名を以て  
 是は宇治にてハ淡路川深川也の産といふ者ともよびて常呂他あり











鯨魚

のよに刺きて人を驚きとて死く。鳴く。人を捕ふ時、それほど  
かあーじやうと出と。今梅に享保十三年戊申、秋東國西、洪水世  
ころよとい魚うせらる。ちよーて後餘あまがと云魚東まに生びう。いから  
くハぎで鯨に愛し。いも物れ。

杜父魚

をまづ○安房か吉浜村けらまにて。なまぎとといひ。よにせんまを  
と今梅にいづよ妙本とと早うと。日蓮宗をいふ家流ちうりゅうして、大乗法を  
受持して一切法種ハ二衛ぜんの経行ありと。誹謗ひてりと愛に淨土家門の在  
おわつて餘あまがをさあまぎと呼るまぎと。六南をいふ。の各号ハ略語をいふ  
それよあして日蓮宗の里民りみんにせんまやうと呼してわあらん  
かどう○系大坂にて。いーもらか茂川まで。ごう漢義かんぎにて。いやする  
伏見にそく。川をこぞ近ゆきて。むこ又どいりまん又いーごー又ちこ九  
よそ。いんが鏡おまそ。ねんまの越おまそ。かくちつ生をいして。ごん

白負 海平一



賀まて。○まてふ。ほり相種及ほり。後河上。後下。後陸奥。外。おにて  
 の。か。う。と。と。後河。沼。津。ま。て。ハ。○。か。ど。い。と。と。今。按。に。い。魚。種。於。甚。多。し。後  
 水。法。に。よ。り。て。飛。ま。さ。し。か。ら。ま。大。小。の。品。も。多。し。入。九。一。於。別。名。是。と。さ。り。江。戸  
 にて。嘗。と。れ。魚。これ。又。と。類。多。し。○。ま。て。せ。○。之。年。物。と。い。ふ。及。凡。の。海  
 物。理。に。て。せ。釣。を。り。に。之。年。物。を。一。を。ば。ら。ち。の。名。と。あ。る。は。ん。せ。に。お。り。お  
 又。名。あ。れ。ば。う。く。と。て。書。も。又。あり。又。○。だ。ら。う。と。せ。そ。ハ。下。品。也。又。○。一。ま  
 くと。せ。と。ら。ふ。も。そ。か。ど。う。と。又。一。脚。と。い。ふ。源。語。玉。鬘。卷。に。ち。う。さ。川。の。い  
 脚。な。と。や。う。の。道。達。し。の。い。て。下。略。河。海。ち。う。さ。川。を。ハ。賀。美。川。と。も。い。ふ。又。下  
 賀。美。川。の。東。店。ま。て。と。う。と。調。味。し。て。ご。り。け。と。名。け。て。煮。之。又。か。賀  
 美。の。土。人。ご。う。と。靴。と。い。て。た。し。ん。長。よ。れ。を。地。の。靴。と。い。ふ。又。本。名  
 の。音。門。な。ど。に。て。流。石。の。傷。り。ま。て。年。を。獲。取。さ。ら。ま。て。る。靴。も。元。と  
 いら。ま。を。れ。と。い。ふ。本。と。の。よ。又。か。う。つ。と。い。ふ。物。ハ。也。あ。り。て。者。意。の



魚

降ろこら腹とくにやうてあふにほぶ魚之續格義河書きて

厭鏝あぢや獲をなうらばて降るあぢ

鮓魚

かまづ倭名抄○糸まて。かまづう鴨門まて。かまざらとてかまづ

かまづまて。かまづう鴨門まて。かまざらとてかまづ

吹沙魚

かまづまて。かまづう鴨門まて。かまざらとてかまづ

かまづまて。かまづう鴨門まて。かまざらとてかまづ

あぢ

鮓

あぢ○紀州にて。あぢうらばて。あぢうらばて。あぢうらばて。

あぢ○紀州にて。あぢうらばて。あぢうらばて。あぢうらばて。

あぢ○紀州にて。あぢうらばて。あぢうらばて。あぢうらばて。



和加 佐幾

鱈

伊多

産やとくともえんりや又乳のくも茶ありとそ婦女の産るはる也  
 ころと記○波海まで。よとめの魚伯登にて。あくまぎと常陸まで。よ  
 くらうとそあ授まで。あまもぎと今按にらまぎ又あまの記因也  
 あり之方の湖中に多くこれを捕と又常呂梅川に梅魚とそらと  
 江戸までふらと記也又俳諧多々之の中春の部に梅魚とそらと記ハ  
 梅の花盛のころから魚とそらと記さるる鯛柳鮓（玉）とそらと記し  
 志いら○魚は京にて。捕づら産産たて。くまびと記前の産は  
 かのやま又。ひしとそらと記たて。とうやくとそら乾（干）て賞遊する時ハ  
 去州にてもくまびと記しつらにても捕づら又いいとそら今按にこの  
 魚海船のかつらと記し泳ぐ（泳）人急に釣針とらびて忽と記し釣事  
 是倍よ九万と書もそら魚の數あたらと記しあるべし  
 いづ○茨門及あままで。いづ浪波まで。かづら東玉にて。のら



鰾

毛呂古

石首魚

又まるくともいふ魚上流利根河に多く一説にさいと、犀の海に生るが如きにたると丸をといふ中より林とけりまうが流は任せしむにことへく今按にさいといふ材を多く丸をといへるもおろし定ると魚の魚によるの名なり

うぐお○於及流傍の湖水にて。あまをといふ相及箱根にて。あまらとらよ小なる物をやまめといふ

もろこ一名志摩○を及及おまにて。あまめといふ古佐にて。もろこた又のもつともいふ近江坂本にもろこ川といふ川をいふ魚多し故にもろこと称す。一説に粟津に本多我仲社ありの貝と糸るの目社の名の川にて去人もろこ糸ととも必教十斛と獲とあり

いもち○京江戸ともにいもちといふ西國及東國にて。いもちを後河まの志ろといふ魚うらの中に石をよめて名をいふ又江戸にて







沙喫

或人云そらあまの二品砂と命して食せし人々を害せしゆ今按に古佐  
のまの俗この魚とあまあといふ是ハ蛇の蛻むだといふことありき

あまこ○大坂まで。とらごころのうはは家にて正月ハ。たつごころ厚津  
にて正月まひまハ。もつたつごころ正月の申ハ。たつごころ

廣大和本州

に沙喫和名タハラゴ今京都の魚舖いさやよきんこといふ物

ありと見へる今按に正月朔且海うみ魚とたつごころと書して従す是  
米穀の義によることごまめを田つらと稱するも意同

海鵒魚

えい○上方にて。えぎれと云は戸も。あうえのとも今按に京に  
。えぎれといふハ海魚を赤えののたちうわをといふに同。えいハ種  
類も或是魚ハ芝浦まで。まえい。よこえい。ぐんざい。をいふ  
まえいハ上あまう又よこえいのハ菱形いありて面白。故にまえいハ  
血をぬらして赤あか黄とみいぐんざいのハト思ふ能なく悪臭くさをま



美鯨の子いまは後に在時、刺と申につくそふとが、巻糸の如く  
にてゐる又よきとさへいのみ、あつらひの如く、二枚にありて、刺と申に、  
皮物あり

海鰈

魚び〇美あまて。いせ魚び、美東にて。りまから魚びと云、又年の路  
にりまら海をともり物へ、美東ともいせ魚びと、かまいて、八ヶ海  
産る、たいせ魚びと、年又江戸にてふる、物と、美魚びと、大坂に  
て。備前魚びと、

鰈

水亀

鼈

和名〇筑紫にて。うとと伊豆大崎と、海揚枝と云

いごあ〇あまて。こつとつと

と、ほん、これら、あま、信州、亀と云。〇美魚と。ごん、あ、又、ま、ら、ほん、と云

東近江と。ごら、う、肉、揚、と。ま、ら、あ、伊、勢、と。ごら、紀、伊、と。

ごら、美、及、結、也、越、中、越、後、と。ごら、あ、と云、美、と。ごら、あ、伊、







甲蟹

又ハ蟹は海に割ちて其皮を剥ぎ甲及ハ皮を剥ぎて  
 氣味香く寔に上品なる物也又ハ薄く炙り湯成にひきかきむしり  
 つぶらんに○籠に煮て。うんきうと云薄く炙りて。むくちりたると  
 安房までいそほうづと云九段の油にこそゆりおきたに似るを改す  
 の項多し又大波まだよみて残に煮て思重と云入て縄とつけたハ  
 穴あな又海らぶつといふくまの卵と云煮成流来たりしに卵を生  
 つけ煮とるやそうまうけきとよびて小女いふくまの卵と云煮成  
 煮るとと柿餅とめてそを深赤と云まじし江戸ハ安房まう出  
 をおがに○折清めて。ゆむらうらにといふ兵庫及播磨にて。武文り  
 と云煮あまて。平家蟹と云加賀越前と云。長岡りといふこれ元  
 弘の乱に秦の武文折及兵庫の油に死すと享祿四年細川高國と  
 二好と折及に戦ふ細川の家長島村何某敵一人と挿入て足徳満

鬼蟹



榮螺

不没を初にこれ等の説を倭人附合する事とす

さきえ○相次之浦と遠きにして○つづなるうと云々さきえのうを同たに  
て○とうもいちと云はる事の戯れに尤と云事なきあり浦

里にてわれハ錢のりうに用らるもの死がと先に出と

鰻魚

あび○上総も○うつひと云はる物の甚るくして為良だつきて  
おられハ見つけよう見つけを久し江戸にて一各。うまづのせと又あづ

らる物とバ。さきえと泉州境にけい貝の壳を。あま貝と云これハ

海王のとり貝と云はる海王と云う又鮑のふちる物と云ふと云ふ古伝え

がえと云今様にとさうハ鮑のふちハ種多又鮑のふちと云ふ

にて南と云又あまひの貝のけい貝と云はる海王ハあま葉菜に

「せのあまのあされゆかにうつとてあまひの貝のうこのひたん

蛤蜊

をまづ○上総にて。ぜんを云同云にして蛤の大なる物と云ふと云



浅利貝

小るちを大玉と云 此ハ雄をさうといひ雌をさだといふ  
あきと貝 ○ 物別にて。さしめ貝と云

明光

さるば ○ 物あはにて。つめさる貝と云 筑ばきて。馬の尻貝と云  
去佐きて。たぶら又ちづらと云

蛎

あき ○ 米内まで。せぐらと云 古奇に八里田の蛎と稱し今八里田ハ  
八里とて勢田より一せぐら獲取に近き故也。貝と云

鹽吹貝

志摩まきら ○ 伊勢にて。えび貝と云 孫あきて。つぶと云  
たのまき ○ 大坂まで。志摩貝と云

多伊良木

田螺

たに ○ 米内乃西ふ東武を外國にて。たにと云 去佐きてハ  
一各田貝と云 小田及度孫又渡河相持伊勢路まで。田づかとり又  
つぶと云と云 **和名に拾遺本州** をして。田づびと書り

寄居典

かうな 一名やどりて ○ 伊豆及駿河まで。いろものと云 上孫きて。つぶと云



蛭

細螺

石蛸

海馬

和尚魚

とらふ肥前にて。やうざい蟹といふ **和名** かまか

まき ○大坂まき。かまきと貝と云ふ総れにまき

まき ○中国まき。まきがらがらまき伊勢にて。ごまがらまき

の唐まき。ごまがらまき

かめのて ○ばらにて。志ぬまきまき品川にて。いざとまき

まき ○このまきまき まきとハミ形指の穴の上皮のまきるに似る故名づ

かいま ○佐渡まき。たつのまき。ごと伊薩まき。就の物まき

にて。ごまきまき 是婦人安産の守り

まき ○あままき。海坊まき。正覚坊まき

いよ漁人のまき。海坊まき。海坊まき。正覚坊まき

寄泥魚のごまきにて。寄泥魚まき。寄泥魚まき。寄泥魚まき

時ハ漁人あままきと酒と飲せて命をたまく **三才圖會** 云東洋大海中







蛞蝓

なめくら下也。○常陸にて。○さぶらまへがら越後まで。○おなまきいとも山津にハ  
大み六寸許のよのまき見系箱田なめくら守其月屋とにまひのぐりて  
蛞蝓けらよ変じりるも然ともことごとく不然

蛇

へび。○愛也及西玉に。○くらなハ東に。○へび後摩まで女の洞に。  
たるらむ。○と云家ヤがらをハとさるハ屋上にまきて嵐を逃ひるのひま籠と捕  
その是黄領蛇也かうりんじや近江にて。○ことまう。○と云捕らる。○なまふそといふ  
津のまよて。○なまびそ又。○おづとらと云筑前まで。○やぶらと云一種赤  
ふよて。○山くらと云と近江まで。○志平へびと云又一種巨蛇こりや和名をくへび  
東よまで。○あそだらあやうと云と近江まで。○あそとと云又一種赤肉及  
赤武まで。○かみらるびと云と安房まで。○さぶらまへびと云筑前まで。○う  
しぐらなるいとも

蜥蛇

まむ。○あまにてびらぐらと呼筑前まで。○をめと云と佐まで。○えと







蛭

あてのかそりと云信及て。ぢまがつと云東武にして。ぢまがばらと云

日本紀 螺羸又中庸 蒲盧の説古註も凡そ云るを東雅に本朝式

を引てまがるのち方といふハ今細太刀と云物也又さそりと云も物也

ことわり常陸まてかそりまてのすもさそり之は信に智恵と云るを

昔はまにさそりまてらまてたよりては信と云ことわり

かいこ○東まて。これことと云越後まて。うすまことと云同ま長也にてハ

○ぼいと云信濃まて。ぼいと云奥及津輕まて大なるものなり

ごことと云小ま物を。まことと云出ぬまて。ごことと云房也まて。ひめことと云

今按に丹波ま桑田郡大原社ハ龍飼也との信仰する神なり

毎年正月廿八日たがらごて花人那系と二月廿一日と春を

云系治のものま社地の山石を猫と名付て備て下向と云ハ蛭也

嵐のつゝぬ呪ちるべし九月廿一日をハ秋ゴトと云て下をたに云び

の物類集解

二二六



治事又極月晦日の東家の大黒柱に灯をさす家まで此氣  
に媚乞蟻をさす人の秘乞を怖るるを起りたるをさす  
蟻もいいたつてものごと奇に

「初子すかひやくに写蟻さすたきくはれらひあやも

一役に著のまを兼やして蟻餌の棚を初子の日に十里の女  
年の年るるに掃出れば蟻の糸綿成就と云

系葉

に大伴

春の初子の夕子の玉と云と詠せらば氣之又東國之繭玉

正月十日に餌を割ち柳の枝或ハ小竹の枝あざに付て繭ふか

後ふことと又蟻ハ去より復おもつる又夏の蟻ハ秋にむて成もの

たれハあましてハまゆもまゆをいつていふ事と云ん又蟻の蟻

は代はあましてハまゆもまゆをいつていふ事と云ん又蟻の蟻

ハ伊勢にてハいろと云又かひこハ子をさす付て子孫終るまで



蝶

物なれば婚禮にめてふまをてふを用ら事禮表の大事をとてハ帯  
 の蝶とらぬ人も有る也又めてふまをてふも實ハ蝶をてらぬ  
 てふ○相續及下地陸奥にて。てふまをてふは輕て。かべもて  
 こまとも云出羽秋田にて。へらこと云越後にて。てふまをてふは修徳  
 まて。あまびつと云一種あけえのてふ風蝶の形大にして黒又羽の縁にあや文をまて  
 上縁をてらぬとてふと云下地能登道にて。ぢづくであまをて  
 毛渡をまびぬて。かまをてあくと云後唐にて。ゆであくと  
 と云を按に蝶種多し。まをてふまをてふに和名かびつと  
 羽をてらぬと云羽良をてふまをてふは蝶とてことと云これらの羽  
 ハかびつとを器にしてひつと又ぬらこと轉し又ぬらこと轉してをこ  
 とたつとら物ならん又胡蝶と云胡字ハ其鬚をい當りて是ハ衣  
 てハまをてらぬ一説又胡ハ之蝶とてらぬとて之よりて蝶くとか

の物類集卷三

三十一



蜻蛉

て字ともよむ

とんごう○東夷仙臺南嶺にて。あけづと云津野にて。たんごう  
 と云常衣及上海州にて。げんごと云あまにて。おんごと云一種紺縹こゝろ  
 茨也にて。紺縹といふも東夷にて。かきとんがと云把前にて。かうや  
 ひりりとも云又一種東夷にて。赤卒わうとんがと云和名ありあむむ之茨也にて。  
 赤うまうやんまとも云あまにして。とんごうと云常衣と野  
 下野也にて。いんごんごとも云越海にて。とんごうと云又。ちごんがと  
 云奥夷にて。たえたりけづと云金津にて。たのうと云とんがと云又一種  
 江戸にて。とんごんがと云とんごんがと云志もからわけづと云肥前にて。  
 志保とと云人たとも云又たある物と。馬大頭ばんたまと云とんごんがと云。とんごんがと  
 云越海にて。山乞がと云江戸にて至って大なると。鬼やんまといふ  
 去佐と云。うやんまとも云是也。東雅曰蜻蛉といふへあまらと云。あまら







茅蜩

蟋蟀

ひざらし ○とほきて○くつむがにまゝなま。かまへまゝ

こほろぎ ○南都くわらにて。さうぐす又。こらくしと云はるに。こほろぎ

と云はる府中。及修徳天皇南都にて。さうぐす。と云はる。然るに

多に。○つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる

くま。又古に云はる。つむがにまゝなま。又古に云はる。さうぐす。つむ

と云はる。つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる

つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる

龜馬

いとど ○あまて。くろく。修徳及仁國にて。かまへ。尾注す。かまぎらひ

遠にまて。かまへ。あまて。くろく。つむがにまゝなま。さうぐす。つむ

こほろぎ。つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる

つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる

落鶏

はるたけ。つむがにまゝなま。さうぐす。よふ白居翁曰。是古に云はる











塔 蝮

いさぎる○又美月及名を又越路にほして○あぐりるら伊賀伊勢  
と○ひきりあはしり○わくしりあはしり○あはしりあはしり○あはしり  
り又牛ひきりなまらふ佐ま○くしりあはしりあはしりあはしり  
ひきりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしり  
あはしりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしり  
はて○あはしりあはしりあはしりあはしりあはしりあはしり  
Shiriko

蜈蚣

しうて○と意して○んがらと云日本紀み出

馬陵

まのりー○まのりー○まのりー○まのりー○まのりー○まのりー  
らうと云

鼓夷

まのりー○まのりー○まのりー○まのりー○まのりー○まのりー  
らうと云



うさぎ 信濃 及紀前 及紀前

水蛭

水蛭 夏の夜 油灯

飛蛾

飛蛾 夏の夜 油灯

境典

境典



緬夷

つこのびーいふは使ハ皂夾さうけつの株かきをたむして羽はをそとれぶ旋まわハ角かくをばいハ角かくは  
但たはさうハ美東みとうをそとらつらつとよ樹じゆと

あぶらびー〇伊勢いせよて〇いせくくびーとて薩さつをそとて〇あまめい  
肥ひなまて〇いせかぶららるる

舞夷

けむびー一名なかむびー〇あまて〇いせくくびーとて薩さつをそとて〇あまめい

〇いせくくびーとて美東みとうのけむびーとて美東みとうのけむびー〇がいせくくびーとて今接

に泉いづみを湯ゆまて六月りくごつ大暑たいしよの比ひ人家にやの屋や根ねの裏うらに毛虫けちゆうを生なまといは使もちの毛けを

〇いせくくびーとて美東みとうのけむびーとて美東みとうのけむびー〇いせくくびーとて今接

多おほ量りやうがどに〇いせくくびーとて美東みとうのけむびーとて美東みとうのけむびー〇いせくくびーとて今接

み又また武ぶ死しの内うちをそとせ出いの吳ご名な〇信濃しんのうをそとて〇あまめい

信濃しんのうの毛けをそとせ出いの吳ご名な〇信濃しんのうをそとて〇あまめい

つこいせ

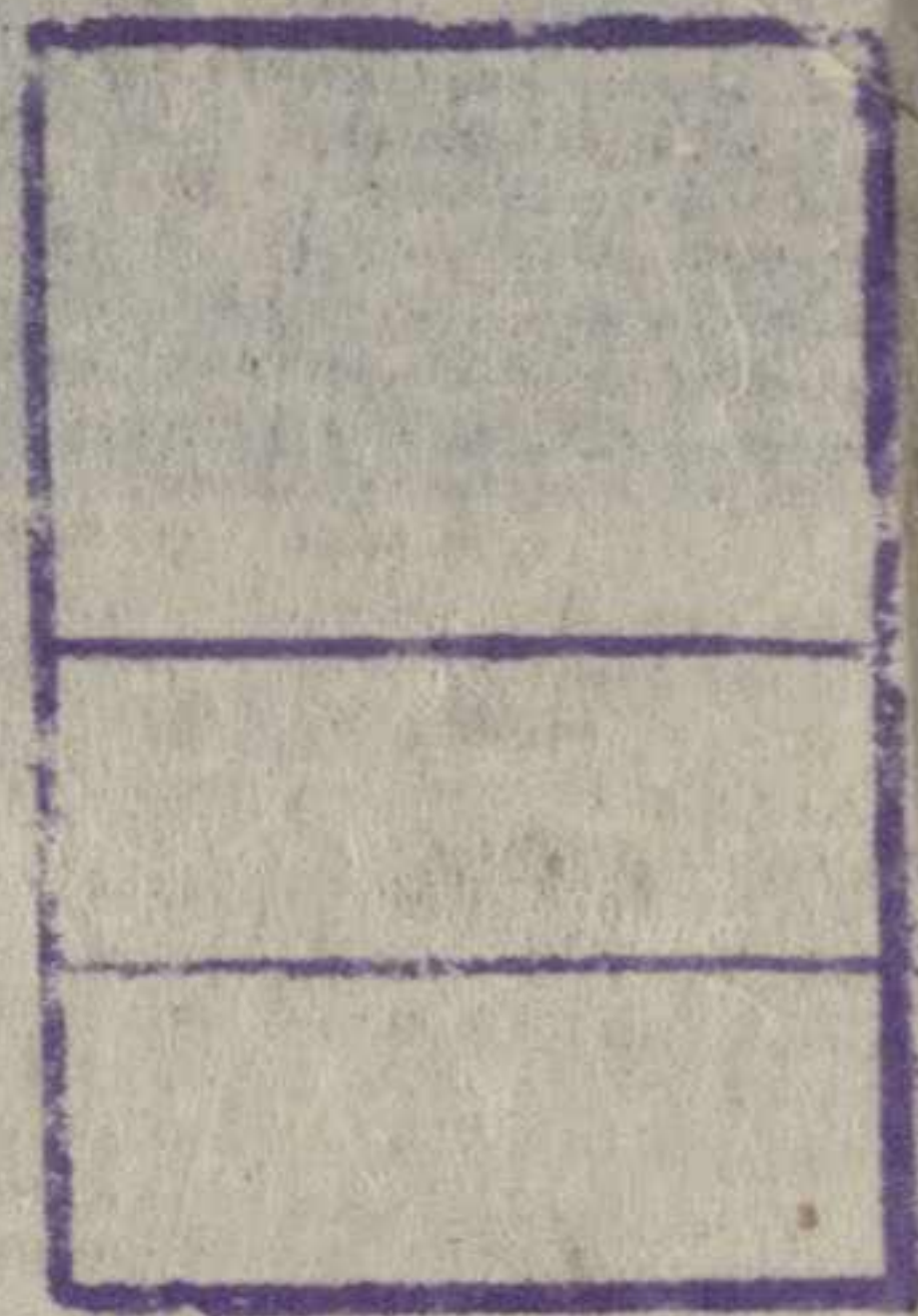






~~22392~~

22707





国立国語研究所



1001089885